

責任の取り方

倉吉 伊藤 文利

ある日の英文毎日に「自分自身の責任の取り方」と題した一文が載っていた。ロータリアンとロータリアンでない二人の経営者が如何に自己の責任をとったか、それを対比した事例である。要約すると――

あるロータリアンは部下の失敗の責任を上司である自分が全面的にとり、会社をやめ、ロータリークラブをも退会し、心機一転、小さな会社をおこし、経営努力して中堅企業になり、元のロータリークラブに再入会し会長になったという成功物語。

一方は、子会社の破産を素知らぬ顔、そして子会社の経営を非難ばかりしていた親会社の社長は、やがて自分の会社の重役会で、その地位をうばわれ、代表権のない会長にさせられ悲哀をかこつ不成功物語である。

さて、このコラムの担当記者は決してロータリアンをほめてはいない。冷静な目で正しくロ

ータリアンを評価している。今までマスコミがロータリーなるものを、このようにクールで正当に評価したのを見たことがなかった。開業医である私は医師の悪口ばかりを書くマスコミに不信感をいだいていたが、しかし、このコラムの一文でのロータリーの正当な評価が大変うれしく、紹介した次第。

(皮膚科医)